

文化や生活・教育環境の違いによる思考の差について

前日本メキシコ学院・日本コース教諭

東京都府中市立府中第二小学校主任教諭 森山 暁生

キーワード：メキシコの教育事情、芸術、異文化理解、国際感覚

1. はじめに

派遣先であるメキシコ合衆国（以後メキシコと記す）に設立されている社団法人日本メキシコ学院（以後リセオと記す）には、文部科学省から認定された日本コース（小学部・中学部計140名前後）と、メキシコ教育省（Secretaría de Educación Pública 以後SEPと記す）が定めるメキシココース（幼稚園部・小学部・中学部・高等学部計1000名前後）が同じ敷地内で勉強している世界でも珍しい学校である。カリキュラムはそれぞれ違うが、運動会や文化祭などの行事を合同で行ったり、年に数回交流授業を行ったりと、両コースが関わる機会が多い。また、日本コースは、近隣の在外教育施設と比べ、駐在員の子どもだけでなく、永住者の子どもが通っている割合が高い。そこで生活環境や国籍などの多様な面から思考の差を感じ取れるのではないかと考え、「文化や生活環境の違いによる思考の差について」を赴任時より研究テーマとし、取り組んだ。その結果を報告する。

2. 調査・研究の結果

2017年度、小学部図画工作（以後図工と記す）・中学部美術（以後美術と記す）・中学部技術（以後技術と記す）での交流授業や体験入学時の授業では、導入では簡単なスペイン語で説明をしたが、言葉が通じない故に授業が進むにつれ、児童生徒の率直な気持ちが、指導者が想定していない形として活動に表れた。

2018年度は、なぜそのような活動になるのかを理解するため、また帰国後の指導にもつなげるためにも、メキシコ国内における文化的環境や児童生徒が置かれている生活環境の理解を深めた。

2019年度は、日本とメキシコの文化的環境の相違・生活環境を意識しながら交流授業などを行い、調査・研究を進めた。研究を進めるうちに、外国語教育についても考えるようになった。また、メキシコでの生活を進めていくうちに愛国心についても考えるようになった。そこで、当初立てた「文化・生活の違いによる思考の差」という研究テーマに教育環境も加え、まとめることとした。

（1）文化に対する意識

メキシコではSEP指導の下、SEPが定めている教科書を使用しているが、小学校芸術（以後ARTEと記す）で使用する教科書は、日本の教科書で例えると音楽・図工が混ざった作りになっている。リセオのメキシココースに見学に行った際は、主に音楽を扱い、授業をしていた。メキシココースでは音楽が重視される傾向があるのか、メキシココースから日本コースへ体験入学に来る児童生徒のアンケートの中に、「日本コースでの図工や美術・技術の授業内容が充実してうらやましく思う」というものがあつた。また、メキシコで育った現地採用教員に話を聞くと「メキシコには図工や技術の授業がなく、日本コース内の技術室にあるような道具に触る機会はない。体験入学で来た生徒は楽しかったと思うよ」との回答があつた。一方、街中には至るところに壁画がある。メキシコでは識字率が低かったため、壁画で歴史を伝えていたという歴史もあり、世界的な有名な画家が生まれている。そのような背景からか、公立の病院や空港内にも壁画がある。また壁画に限らず彫刻等の立体も含めたパブリックアートが街中に溢れている。そのため国籍を問わずメキシコで生活している人は日本で生活している人よりも芸術に対する敷居が低く感じた。メキシココースの美術の授業を参観したり、日本コースに体験入学に来た児童の授業の様

子を見たりしていると、周囲の目を気にせず伸び伸びと題材に取り組んでいる様子を見ることができた。

図工を指導する際、児童の感性を引き出すために、題材を設定するにあたり、指導者が児童に付けさせたい力を考えるとともに、児童自身に自己決定をゆだねる場面を展開の中で多く設定するよう心がけている。メキシココース児童が体験入学に来た際にも、導入時の説明は日本語と同様の内容を簡単なスペイン語で説明した。しかし授業を進めるにつれ、予め想定していなかった反応があった。展開時にスペイン語での細かい指導ができなかったため、メキシココース児童にとっては題材に対する必然的な説明だったのだと考えられる。一方日本コース児童は言葉が通じるが故に、無意識のままに、指導者が意図していた展開に向けた手順にのってしまったと考える。言葉が通じなくても教師側が意図した展開になるような題材を研究していく必要性を感じた。また、そのためには学校や地域の特徴を理解し、目の前にいる児童の背景を理解することの大切さを感じた。図工だけでなく、美術等の芸術的な教科、技術等の実技的な教科は、普段教室で行うことが多い一般的な教科と違い、児童生徒一人ひとりにゴールがあって構わない特性がある。だからこそ、児童生徒に言葉があまり通じなくても、指導者が身に付けさせたいと考えたねらいが、児童生徒に必然的に伝わるような題材を設定し、指導にあたることの大切さを再確認した一時だった。

またメキシコの街中を見回してみると、一人ひとりが自分の個性を前面に出していると感じることがある。ダウンジャケットを着た人が半袖姿の人と一緒に歩いたり、原色使いのカラフルな服を着こなしていたりと、日本のように周囲の目や流行を気にすることよりも自分の価値観に合わせた着こなしをしている人が多いことである。また男女関係なく、体のラインがはっきりと分かる服装で生活している姿も目立つ。こういう点からも、メキシコで生活している人々は、日本で生活している人々と比べ、周囲に流されず個の価値観を大切に、主張しているのではと考えた。このようなことから、一般的な日本人よりも幸福度を高く感じている国民性を改めて伺うことができた。日本では、自分のことよりも周囲に気を配り、協調することが重要であり、相手に合わせる事が美德とされることもある。一方メキシコでは、周囲を思い遣る気持ちは日本よりも高く感じることはあるが、根本は自分の価値観を大切に、行動に移しているように感じる。メキシコの教育現場には日本の様に図工・技術という授業があるわけではなく、美術も日本と比べると時数は少ないが、生活環境からも ARTE を学んでいるのだと考えた。そこで今後は、教育が生活環境にも左右されるという点を意識し、教育現場同様に生活環境を整えることの重要性も意識しながら指導にあたらうと考えるようになった。

(2) 生活環境・教育環境から見てきたこと

リセオでは、メキシココースと交流する機会が数多く設定されてはいるが、日本コース児童はメキシコで生活しているにも関わらず、メキシコを知る場面が少なかったのか、消極的・受動的に参加している児童が数多く目に付くことがあった。そこで、両国の実生活と重ねながら交流授業を行うことで、メキシコを身近に感じ、親近感をもつことで、交流授業に積極的・能動的に参加するのではと考え、以下の交流授業を設定した。

① エイサー交流

運動会で両コースと一緒に踊るための交流授業である。2017年度は沖縄の盆踊りであるエイサーを踊ることになっていた。例年であれば踊りを教えるにあたり、一方的に日本コースから踊りを教えていたそうだが、それでは双方向に関わる機会が少なく、果たして交流と呼んで良いのか疑問に思った。そこで、メキシココースからは日本の盆にあたる死者の日について教えてもらうことをメキシココースに提案し、実際に教えてもらった。児童の感想からは「メキシコの理解が深まった」という内容が多く出てきた。その後、死者の日をテーマにしたディズニー映画が上映されたこともあり、児童からメキシコを理解しようとする気持ちを見る機会が増えた。

② お弁当交流

2018年度に行った交流である。7月に行った、メキシココースからの体験入学生が数名加わった美術の授業では、両国の文化を扱った題材を設定したが、メキシコ人生徒から見た日本のイメージが作品に表れていた。そこで、

文化や生活環境の外見だけでなく、本質を知ることが、より思考の差に迫ることにつながると考え、12月に両国の昼食文化の紹介交流を行った。この交流授業を通し、両国の食に対する考えを理解でき、その結果、普段何気なく見ていたメキシココースの昼食風景の見え方が変わったという感想が、児童から多く出てきた。

③ 和太鼓交流

2019年度に行った交流である。2017年度に担任をした学年であったので、エイサー交流の話も絡めながら、盆踊りで演奏する盆太鼓を例に出しながら交流を進めた。メキシコでは、フィエスタと呼ばれる祭が年中行われているので、子どもの時から踊りや音楽に親しみながら育つことが多い。そのためかメキシココース児童はすぐにリズムを覚え、和太鼓演奏を楽しんでいた。その様子に日本コース児童が驚いていた。生活環境の違いを感じたひと時である。

④ 運動会

リセオは日本・メキシココースの両コースで日本的な運動会を行う世界でも稀な学校である。その運動会の練習の過程で気付いた点を述べる。メキシココース児童生徒が、日本コース児童生徒の様に練習から本気で取り組まずに、本番だけ力を入れようとしている光景を見ることが多々あった。その都度、日本コース児童から見下すような発言があった。しかし、実際には練習で怪我をするリスクを減らすために、全力で練習をしないようメキシココースの指導者が指導していたのである。また、SEPの規定に、体育着を忘れていても授業には参加させなくてはならないという点があるため、制服の児童生徒が数名参加していた。

どの交流でも、SEP等の教育環境はもちろん、生活環境も踏まえながらメキシココースの事情を説明することにより、メキシココースを見下すことが減り、他者を理解しようとする気持ちが深まっていった。

(3) 外国語の重要性

島国の日本で生活していると、日本語で完結してしまうことが多く、外国語の重要性に気が付きにくいのが現状である。また日本人のパスポート所持率が約23%（2018年12月現在）というデータもあることから、中々日本の外へ出ないのも現状である。日本国内に目を向けてみると、外国人観光客を相手にした免税対応の店舗も増えてきてはいるが、都市部のそのような店舗では、日本国籍の従業員よりも外国籍の従業員が目立ち、外国人への対応は外国籍を持つ従業員に任せている場面が多く目に付く。一方、メキシコでは他国と大陸と地続きという環境からか、英語を使う環境にある国民が日本よりも多い。私が生活していたメキシコシティには、日本以外からも様々な国・様々な人種の人々が定住し、仕事をしている。学校も私が知る限りでは近隣にアメリカ系・イギリス系・フランス系の学校がある。中国人街や韓国街もある。そのような地域では英語が通じる。また地方の観光地に行くと、第一声は英語で話しかけてくる。こちらがスペイン語で返しても、相手は英語で対応してくるケースが多い。

教育という視点で考えていくと、上記で述べたように日本よりも外国語が生活に密接しているからか、SEPが定める教育課程に組み込まれている訳ではないが、メキシココースでは小学校1年生から毎日2時間の英語の授業がある。そのような環境で勉強しているからか、美術の授業では、説明は全て英語で行われたいた。一方、近隣の公立小学校に見学に行った際、英語の授業は行われていなかった。そのことに対し、見学先の校長先生に質問をしたところ、「英語の授業を設定したくても、現実的には難しい」という回答を聞いた。メキシコの経済格差を垣間見た一時であった。日本では学習指導要領に示されているので、授業内容や質に差はあれど、公立の学校、私立の学校を問わず、全ての学校で外国語教育に取り組んでいる。今後、内容や環境を整え、質を上げていく必要性を感じた。

(4) 愛国心

メキシコでの生活を続けるにつれ、愛国心について考えるようになった。日本は他国に占領されたことはあっても、植民地になったことはない。基本的には平和が続いている国である。第二次世界大戦等の影響からか、日本では愛国心という言葉に抵抗をもち、世論も割れる現状がある。一方、近代史において、メキシコはスペインから独

立したという事実があるので、メキシコという国を愛し、国旗や国歌を大切にしている。リセオでは学院朝会という行事があり、幼稚園から高等部まで一堂に集まり、最初に“エスコルタ”と呼ばれる担当になった幼児児童生徒が日本・メキシコ両国の国旗を持って入場する。その際、敬礼で両国の国旗を迎え入れ、迎え入れた後は全員で両国の国歌を歌う。その後、メキシコの歴史に関する発表等を行う。日本コースが担当になった際は、日本の文化等を発表した。この行事はSEPが定める教育課程にも組み込まれているため、公立学校・私立学校関係無く、同様の機会が設定されている。よって国旗・国歌に触れる機会は日本と比べると断然多い。

また、街中を見渡すと1年を通し、街中の中心部には大きな国旗が掲揚され、独立記念日が近づくと街中が国旗の色で染まる。独立記念日前日には「VIVA MÉXICO!」と街のいたる場所で国民が叫ぶ。独立記念日当日には軍事パレードが盛大に行われる。当日の生中継も含め、前日からTVは独立記念日一色である。また毎週のように行われるメキシコ市内のマラソン大会では国歌斉唱の後に号砲が鳴る。赴任中、近隣の国に行く機会があったが、その際にも行く先々でメキシコ同様に国旗・国歌を大切にしている様子を見ることができた。さらに人々の会話や行動の中にも自国を大切に、誇りを持っている姿を見ることができた。日本に住んでいた時には見えなかった光景である。大学生の時、外国人が日章旗に火を付け騒いでいる映像がTVに映っていても、当時は大きく考えてはいなかったが、メキシコで生活したことで、TVに映っていた外国人は、外交問題になりかねないことをしていたのだと考えるようになった。島国の日本では、外国は遠い存在である。ただ、世界がグローバル化している現状を考慮すると、今後は海外の様子も視野に入れながら考えていく必要がある。その際、外国の人々は自国に対しどう考えているのかを理解していくことは大切である。日本が発展・繁栄していくためには、世界の基準も考慮した上で、今後どのような事を意識すべきか考え、子どもたち一人ひとりの価値観も大切にしながらグローバル人材を育てるための指導をしていく必要がある。

3. 終わりに

日本で生活をしていて、日本人は間違えることを恥とを感じるのか、完璧を求める傾向があると感じていた。しかし海外で生活している日本人と関わることで、人種ではなく環境も大きく影響していると感じるようになった。幼少期から在外教育施設で育ってきた児童生徒と接すると、良い意味でも悪い意味でも周囲の目を気にせず行動することが多いと感じた。物怖じせず色々なことに挑戦しようとする気持ちを感じることもあった。

日本では外国語を話す人と関わる機会は少ない。そのため知識はあるのに、いざ話そうとすると無意識に文法など完璧な会話を求めてしまうのか言葉が出てこないことがある。しかし身ぶり手ぶりでも伝わるのが分かった。もちろん言語は大切で、単語を並べるだけでもよいのでその国の言葉を話すと思疎通がスムーズに行えることを再確認した。

一方、メキシコに住むことで外から日本を客観的に見て感じた事もある。勤勉さである。メキシコで教育関係者と雑談した中で、「日本の教育をメキシコで行うことは難しい。なぜならメキシコ人は日本人のように一斉に同じ事をするのが苦手だからだ」という話を聞いた。メキシコでの生活を進めていくうちに、右にならえ的な日本の風土を私は否定的に感じるようになっていたが、この一言で、見る視点を変えると、弱みが強みに変わる事に気付いた。今あることをベースに、日本人に合った指導方法を試行錯誤しながら研究し、授業力を高めていく必要性を感じた。

自分の専門分野である美術教育から本研究を始めたが、研究を進めるうちに外国語教育や愛国心など、日本に住み続けていたら考えもしなかったことを考えるようになり、視野が広がった。今後日本が発展していくためには、世界を相手にしていくことが重要であり、そのためには世界基準で物事を考えていく必要性を痛感した。私が海外赴任で体験したことを、今後の教育活動に生かし、日本の更なる発展に尽くしていきたい。